

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## Research Writing at a University Museum

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 原, 礼子, 福野, 明子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00001746">https://doi.org/10.15021/00001746</a>

## 博物館におけるリサーチ・ライティングについて

原 礼子 福野 明子

国際基督教大学湯浅八郎記念館

### Research Writing at a University Museum

HARA Reiko FUKUNO Akiko

Hachiro Yuasa Memorial Museum (International Christian University)

#### 要約

すべての研究機関と同様、博物館においても、研究の成果を発表するためにリサーチ・ライティングが不可欠である。それらは展示図録や研究紀要、報告書など様々な刊行物となって出版される。しかし、一般の研究論文との大きな違いは、不特定多数の読者の要望に応えるために、誰にとっても解りやすくしなければならないという点である。私立大学の博物館学芸員としての経験をもとに、最初に、原礼子が博物館におけるリサーチ・ライティングと一般の研究論文との相違点を考証しながら、解り易い論文の在り方を探るとともに、博物館が目指す「ハンディー」な図録について述べた。次に、実際に編集を担当してきた福野明子が、執筆から出版までの問題点および、デスクトップパブリッシング (DTP) の具体的な方法について紹介した。

Several kinds of text are published by museums, and they often involve research to some extent. In this paper, we discuss the nature of research writing at a university museum, and then consider the actual technical issues we have encountered in our work at the ICU Hachiro Yuasa Memorial Museum. Because our budget for preparing and publishing texts is very limited, we have turned to small computers and desk top publishing (DTP) for much of our work. Almost every aspect of publishing is done inside the museum, from planning, research, writing, translating, and editing, to layout and book design. The Yuasa Museum has attempted to produce high-quality material using low-cost methods, but the nature of this museum publication style has yet to be reviewed more generally.

#### 博物館に求められるリサーチ・ライティングとは何か

##### 一般の研究論文との相違点

全ての研究者にとって、研究の成果を記録し広く公表するためにリサーチ・ライティングが不可欠であるように、博物館で勤務する学芸員にとっても、調査や研究の成果を博物館の活動に反映する上で、リサーチ・ライティングは避けては通れぬものである。大学附属の歴史系博物館で学芸員として勤務してきた経験をもとに、ここでは博物館にお

けるリサーチ・ライティングの問題について考えてみたい。

博物館においては、大別すると以下のような刊行物のために、リサーチ・ライティングが必要とされている。

- (1) 展示図録（特別展図録、所蔵品図録、展示解説書など）
- (2) 報告書（年報、活動報告書、埋蔵文化財発掘調査報告書など）
- (3) 研究書（研究紀要、所蔵資料等についての研究書など）

これらの中でリサーチ・ライティングという言葉の意味に最も近いのは、研究紀要に学芸員が研究の成果を発表するための論文といえるだろう。しかし、展示活動が主な事業である博物館においては、展示図録や展示のための解説文が重要な役割をめている。また、ここで注目されることは(2)や(3)は博物館の予算で作成され、関係研究機関に無償で配付されることが多いが、(1)は広く一般の人々を対象に有料で販売されることである。この予算的な問題については後で触れることにする。

さて、近年では特別展の図録に、そのテーマに関する研究者の論文が数多く掲載される例も増えてきた。十分な研究の成果が多くページを使って発表される事は、価値のあることと思うが、一方で電話帳のように厚く、石のように重い図録を手にし、購入を躊躇する人々も多いのではないだろうか。はたして、誰が、これ程多くの、また専門的な情報を必要としているのか？

実は、この疑問に対応しなければならないことが、一般の研究者のリサーチ・ライティングと博物館におけるリサーチ・ライティングが最も異なる点であるといえよう。どのような論文においても、明瞭で解り易い文章が要求されることは言うまでも無いが、研究論文においては、読者がある程度その分野の基礎知識を持っていることが想定される。しかし、博物館において所蔵品の解説をする際には、対象が「誰」であるのかという点に、特に留意しなければならない。年令や国籍など文化的背景や興味の対象が異なる人々に、「如何に解り易く説明するか」ということが学芸員に課せられる大きな課題である。では、具体的にどのように対応すればよいのか？ 以下、筆者が勤務している博物館での試みを紹介させていただくこととする。

## 博物館が目指す「ハンディー」な図録とは

国際基督教大学 (ICU) 博物館は大学附属の博物館であるが、入館者は近隣に住む一般の方々の方が8割を占めている。そこで図録の対象としては、中学生以上の大人で、興味は有るが専門知識はあまり持ち合わせていない人々を想定している。そのため専門用語の使用を避け、読みにくい言葉にはルビをふり、必要に応じて用語解説をつけるなどの工夫をしている。しかし、展示室の解説パネルも同様のレベルで書かれているため、社会科学見学で訪れる小学生の要望には対応できていない。近年、学校教育と連携し、小学生向けのガイドブックやワークシートを用意する博物館が増えてきたが、当館においても

児童向け図録の刊行が今後の課題である。

また、国際基督教大学は国際性を理念に掲げ、日本語・英語の2言語の使用を実践していることから、当館における出版物も全て日本語・英語の2言語で発行されている。国立民族学博物館のように4言語の案内を用意している博物館に比較したら、とても充分とはいえないが、ほとんどの印刷物を2言語で作成することにより外国からの見学者のニーズに応じている。日本では博物館の刊行物が日本語のみで出版される例がまだまだ多いが、特に日本の歴史や文化を紹介する博物館においては、なるべく多くの情報が正しく翻訳され、出版されることが望まれる。

しかし、2言語を使用すると分量がどうしても増えてしまう。そこで当館で図録作成の際に、第1に心掛けていることは「ハンディー」、つまり物理的にも内容も「手頃である」という点である。

展示会の図録においては、挨拶文の次に数頁にわたって展示の解説文があり、出品資料のカラー図版が続く形式が一般的である。しかし、当館の場合はひとつの長い文章で解説することを避け、幾つかの項目に分けて説明する方法をとっている。たとえば、『染のかたがみ一文様の展開』<sup>1)</sup>の図録を例にとると、型紙についての概要を説明するのに、「型紙とは」「型紙の歴史」「型地紙の工程」「型染の方法」「型染の工程」といった項目を設け、それぞれの項目を400字程度で説明してみた。次に「突彫」「錐彫」「道具彫」など技法についての説明は実物の写真と共に掲載し、その他の出品資料は文様別また形態別（2枚型／3枚型など）に紹介し、巻末に用語解説、出品目録、参考文献リストを付けた。

簡単な解説は200字、込み入った内容でも400字というように解説文の文字数を制限することにより、書く側としては文章の無駄を省きつつ、最小限必要な情報を盛り込むことが容易となる。また読む側にとっても項目のタイトルが見出しの役目をはたし、必要な情報を順不同に取り出すことが出来るのではないだろうか。

展示会場で立ったまま解説パネルを読む場合に、解説文は150字が集中して読むことができる限界の長さといわれている<sup>2)</sup>。そのため、博物館では展示解説の際に、できる限り短い文章の中により多くの情報を盛り込まなければならない。この方法を図録においても取り入れているのである。項目ごとに区切ってしまっただけでは確かに研究論文としては成り立たないであろう。しかし、一般の人々に興味を持って読んで頂くためには、これもひとつの方法ではないだろうか。勿論、更に詳しい説明が必要な場合は、項目を増やすことも可能である。

## 出版の予算に係わる諸問題

次に「ハンディー」であるための、もうひとつの要素として「価格が手頃」であるという点も忘れてはならない。当館では、印刷物の企画、執筆、翻訳からレイアウトまで全

て当館のスタッフで行なっている。そのため、予算が節約でき、手頃な価格で図録を販売することが可能となった。

リサーチ・ライティングの出版は、営利目的の商業出版とは異なり、利潤の追求が本来の目的ではない。しかし、世に出す出版物として体裁を整えていく上で必要となる費用については、無料で配付される刊行物の場合も含めて不可欠である。これまで、あまり指摘されることがなかったが、現実には多くの問題がここに起因しているともいえる。質の高いリサーチ・ライティングの原稿を書くためには、個々の研究者が研鑽を積む以外に解決の方法はない。だが、すでに優れた論文が完成したとしても、それを世に出す場合、予算の違いによって以下のようなケースが考えられる。

#### (1) 予算が潤沢な場合

企業や公官庁などの出版物に見られるが、この場合、問題は比較的少ないといえるだろう。必要な情報を持った担当者がひとりいれば、それぞれの分野の優れた翻訳家や編集、出版の専門家に高額な費用を支払ってでも業務を委託でき、その結果、かなりレベルの高い刊行物を作成することが可能だからである。ただし、決められた年度内に予算を消化する必要に迫られてか、無料で配付される刊行物の中に、必要以上に豪華なものや、誰のための出版物か解らない例が数多く見受けられる。これは改善されるべき点であろう。

#### (2) 予算は充分ではないが、優れた担当者がある場合

学会の研究紀要など、現実にはこの状況で出版されているケースが大半ではないだろうか。この場合、担当者自身また担当者の知人を含めた人々の献身的な協力により、予算の不足分をカバーして優れた出版物を出すことは可能である。しかし、本務を抱えながら編集を担当する人の負担は測り知れない。また、専門の者が係わる場合に比べ、素人が行なうことからくる質の低下の可能性も避けられない。

#### (3) 予算が無く、優れた担当者もいない場合

残念ながら、どんなに素晴らしい論文でも、世の中に出ることは難しい。

以上のような予算の問題を克服し、リサーチ・ライティングが印刷物になったとしても、次には「本当に必要としている人の手許に届くのか？」という、販売経路や配布方法のこともあり、問題を数え上げたらキリがない。

「与えられた頁があるから書く」、「予算があるから出版する」というのではなく、博物館で図録を出版する時のように、「誰のために書き」、「何のために出版するのか」、

「いくらなら買ってもらえるのか」というような点を更に考慮することによって、一般のリサーチ・ライティングの内容や刊行物の質も上がるのではないだろうか。

## リサーチ・ライティングから出版まで—国際基督教大学博物館 湯浅八郎記念館の場合

### 執筆から出版までの問題点

研究者は論文執筆およびその出版によって研究成果を発表するが、日本人の場合、日本語だけで発表してもその成果は世界の人々にほとんど知られないという状況がある。そこで、ほぼ必然的に日本語で書かれた論文は英語等に訳されることになる。ということは、論文を出版する過程の中に、研究者である執筆者、それを翻訳する翻訳者、更に校正及び編集をする編集者が存在するのである。日本の場合、論文の内容やリサーチ・ライティングの能力（英語力）自体の問題の他に、執筆者・翻訳者・編集者間における問題にも注目する必要がある。分野が専門的になればなるほど、論文の翻訳者や校正者、編集者を見つけるのは難しくなり、またそれを出版できる形に整える技術も必要となる。

この問題を解決するために、湯浅八郎記念館では執筆から出版までをデスクトップパブリッシング（DTP）を用いて館内で行なっている。ここでは、小規模博物館におけるリサーチ・ライティングから出版までのひとつの形態と其中で直面した問題を紹介する。

### 湯浅八郎記念館における出版活動『泰山荘 松浦武四郎の一昼敷の世界』の事例

湯浅八郎記念館の出版活動の原点は、大学博物館の学芸活動の一環として、見学者や学生のために日頃の研究の成果を反映するような図録を展示の補助手段として提供することである。また、大学や所蔵コレクションに関連する研究書を出版することもあげられる。現在、湯浅八郎記念館には以下の2種類のリサーチ・ライティングを伴う出版物がある。（表1参照）

- (1) 館の展示または資料に関する研究から始め、執筆、翻訳（英訳）、編集、レイアウト・デザインをし、図版以外はほぼ完全版下の形にして入稿し、出版する。出版の最初から最後まで、印刷以外のすべてを館内でこなす。
- (2) 館内外の研究者による英語で書かれた研究があり、それを日本語に翻訳、編集し、レイアウト・デザインして出版する。

湯浅八郎記念館の出版物の特色は執筆・翻訳・編集そして出版までのほとんどすべて

表1 国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館 刊行物 (刊行年, 言語, 頁数)

List of Publications of the Hachiro Yuasa Memorial Museum (year of publication, languages used, page length)

1. 『湯浅八郎記念館 年報』(*Annual Reports* Nos. 1-19) (1984-2002, J/E, 46)
2. 『展示品解説 考古資料』(*Guide to the Archaeological Exhibition*) (1984, J/E, 34)
3. 『日本考古学の概要と国際基督教大学構内の遺跡』(*An Introduction to Japanese Archaeology*) (1993, E, 32)
4. 『藏品図録 民芸』カラー／白黒 (*ICU Hachiro Yuasa Memorial Museum Folk Art Collection*) (1989, J/E, 62)
5. 『藏品図録 民芸』カラー (*ICU Hachiro Yuasa Memorial Museum Folk Art Collection*) (1999, J/E, 62)
6. 『藍染』白黒 (*Japanese Indigo Textiles*) (1987, J/E, 32)
7. 『藍染』カラー (*Japanese Indigo Textiles*) (1997, J/E, 32)
8. 『染のかたがみ一文様の展開』(*Japanese Paper Stencil Designs*) (1985, J/E, 46)
9. 『粧いの道具—柄鏡とお歯黒道具』(*Cosmetic Articles: Japanese Mirrors and Teeth-blackening Utensils*) (1986, J/E, 34)
10. 『インドネシアの絣』(*Indonesian Ikats from the Oda Collection*) (1993, J/E, 44)
11. 『唐草 湯浅八郎記念館所蔵品にみる日本の文様』(*Karakusa—Japanese Traditional Design from the Museum Collection*) (1994, J/E, 30)
12. 『太田コレクション 鐔』(*Japanese Sword Guards from the Ota Collection*) (1997, J/E, 43)
13. 『刺子とこぎん』(*Japanese Quilting: Sashiko and Kogin*) (1995, J/E, 47)
14. 『幾何・器物 湯浅八郎記念館所蔵品にみる日本の文様』(*Geometric Patterns and Design of Utensils*) (2002, J/E, 80)
15. Henry D. Smith II 『泰山荘 松浦武四郎の一畳敷の世界』(*Taizansō and the One-Mat-Room*) (1993, J/E, 260)
16. J. Edward Kidder 『法隆寺とその時代』(*The Lucky Seventh: Early Hōryū-ji and Its Time*) (1999, E, 450)

の工程を館内で行なっていることである。また、これを可能にしたのがDTPの導入である。執筆はしていないが、上記(2)の具体例としてここでは『泰山荘 松浦武四郎の一畳敷の世界』(以下『泰山荘』)を取り上げる。

『泰山荘』は湯浅八郎記念館で行ったDTPを用いた出版物の第1号であり、以後刊行した他の出版物はここで得た経験をもとに発展していったものといえる。今でこそ日英両語で出版されるものを多く目にするが、1988年に始めてDTPを導入した時点ではまだ一般的ではなかった。知識も経験も無いまま、試行錯誤を重ねながら260ページの研究書を足掛け7年の歳月をかけて1993年に刊行した。その間に年間3本の特別展を開催し、また展示図録2冊(『インドネシアの絣』、『湯浅八郎記念館所蔵品にみる日本の

文様—唐草)と年報の刊行などを同時に行なった。

この研究書の著者は1985年から1987年までカリフォルニア大学東京スタディセンター長として来日し、国際基督教大学で教鞭をとられたヘンリー・スミス教授(現コロンビア大学教授)である。教授は大学の敷地内にある泰山荘に注目し、調査を始められた。

泰山荘とは、裕福な実業家によって建てられた別荘で、その中に「一畳敷(いちじょうじき)」とよばれる松浦武四郎(幕末明治の探検家で、北海道の名付け親としても有名)の建てた畳一枚の書斎がある。友人や知人から譲り受けた日本全国の神社仏閣や歴史的建造物の古材89点を用いて彼はたった一畳の書斎を作ったのである。

スミス教授は精力的に資料を集め、松浦武四郎が著した文献の英訳をし、細かい注釈を加えることによって、武四郎が一畳敷に込めた気持ちとその建築過程を解明し、一畳敷に隠された複雑な歴史を明らかにした。スミス教授の研究には、財団法人三徳庵より茶道文化学術賞が贈られ、その賞金は出版費の一部としてスミス教授より大学に寄付された。また、この一畳敷を含む泰山荘別荘地内に現存する6棟の建造物は、1999年7月16日の文化財保護審議会において国の登録有形文化財となったことを附記しておく。

大学の構内にある重要でかつ興味深い歴史を持つ施設を紹介するために1988年、『泰山荘』の出版は決定された。『泰山荘』は、B5判、260ページのソフトカバー、カラーページ1枚、折り込みページ1枚、186の図版を含む和英完全対訳の研究書である。第1部は「泰山荘小史」と題した本論で、第2部はほぼ全体の3分の2にあたる「資料編」で、一畳敷にまつわる数々の資料を注釈付きで載せたものである。

『泰山荘』の英文原稿はテキストファイルでアメリカからフロッピーディスクで著者より郵送された。データは読み取れる形に変換され、その後、館内で分担して英文の和訳がなされた。

レイアウトに使用したソフトはクォークエクスプレス(QuarkXpress)日本語版バージョン2.1(その後3.3にバージョンアップ)である。写真や図版はプリントまたはコピーを入稿するという形をとったため、まだ完全版下からは遠い状態であった。ちなみに、当時クォークエクスプレスよりもページメーカー(Pagemaker)の方が安価で普及していたのだが、当初から『泰山荘』は100ページ以上におよぶと想定されていたため、より細かな作業が可能だったQuarkXpressが選択された。

使用したフォントは、和文と相性のよい英文フォントを選んだ。基本的に本文には細明朝体とTimes、資料編にはゴシック体とHelveticaを用いた。長音記号(macron)を付けられるフォントがなかったため、フォントグラファー(Fontographer)というソフトを使って独自にTmacron(これはTimesにmacronをつけることができるようにした書体)やHmacron(これはHelveticaにmacronをつけることができるようにした書体)などを作った。

また、フォントサイズは和文書体より英文書体の方を若干小さくするように調整し、ページ上のバランスを整えた。こうすることによって、どうしても和文より長くなる英文の分量を少なくすることができる。

完全にバイリンガルな刊行物ということで、横書きにして原則として見開きにしたときに左ページに日本語（日本で販売するもの、かつ対象とする読者は日本人であると想定したため）、そして右ページに英語のテキストを載せた。この時、英文の方が長くなるので挿図や写真などの図版はすべて左ページ（日本語側）に入れ、右ページの英語と合うように調節しながらレイアウトをしていった。

資料編においては『木片勸進』という縦書きの冊子を1ページずつ挿入すると同時に、細かな部分写真とそのカタログ的な説明を載せた部分などは、友人からの助言をもとに最低限の原則となるグリッド（レイアウト上の区画）を作成し、日本語と英語のどちらの言語で読んだ場合でも同じように内容を汲み取ることができるように工夫した。『木片勸進』は松浦武一郎が記した小冊子で一疊敷を作るために集めた木片の目録である。スミス教授は忠実に原文を英訳し、附随するコメントを付けた。完全なる対訳版をめざしたために原書を縮小した形で載せ、和文を原典からあたって転載し、さらにスミス教授の英文コメントの和訳を載せた。各ページは2段組にし、見開きにした時にページの内側の段に『木片勸進』の原文のページを載せ、和文ページにそれ以外の写真も載せることによって和文と英文の長さを調節した。（図1参照）

### DTPを利用した出版形式の利点と欠点

以上が、『泰山荘』の体裁の概略である。小規模な大学博物館が出版業者を介さずにできた出版の一例である。翻訳・編集そして出版までのすべての工程を館内で行なうことの利点として、まず、どの段階においても第三者が介在しないため、内容の確認や訂正には素早く対処できることがあげられる。常に理想的な形で対話や意見交換が行えるため、問題はほとんど生じない。次に、すべてを同時進行形で行えるという利点もある。これは、臨機応変に対処できるということで、最後の最後まで、レイアウト・デザインに至った段階でも、まだ改善の余地がある。また、出版のためには純粋に印刷費以外は何ら特別な予算がかからない、ということも大きな利点であろう。

しかし、このように必ずしも一貫したやり方が最もよい方法とはいええないことも確かである。様々な仕事を抱えながらの作業になるため、かなり長い時間にわたって携ることになる。より良いものを出すために改善し続けてしまうため、締めきりがあまくなってしまいうということもあげられる。自己責任を確立し、自己管理をしっかりしなければできない作業である。

そして最も問題である点は、刊行物として積極的に売り込み、市場に出そうとしていないことかもしれない。おそらく出版社であれば刊行物は売れて、読まれるものを出版



するのが原則なのであろうが、湯浅八郎記念館ではその必要性和意識が希薄なのである。我々の自己満足で終わっていないか、意図が達成されているか否か、常に反省しなければならないであろう。このような形態で出版を始めて15年が経過したが、今後このような形態がよいものなのか、時間とコスト、またその内容の質をよく考えてみる必要があると思われる。

## 注

- 1) 国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館編、『染のかたがみ一文様の展開』、東京：国際基督教大学、1985年。
- 2) 佐々木朝登、「展示を構成する要素と問題点」、『博物館学講座7 展示と展示法』、東京：雄山閣出版、1981年。